

わたなべうんせん

【渡辺雲僊】

(その二)

矢野町出身の日本画家

その経歴をたどる

山崎 達夫

◎前回は「渡辺雲僊」氏（以下敬称略）の経歴や作品について詳しく触れなかったため、今回あらためて記載する。



昭和二六年 五九歳

●明治二五年（1892）

渡辺俊彦（嘯月庵雲僊）しやうげつあんうんせん 広島県安芸郡矢野町の造り酒屋「神田屋」の次男として出生。（長男の渡辺文友氏は矢野町の元助役で、

矢野町史の編纂にかかわった人である）

●明治三六年（1903）（十一歳）

広島の里見雲嶺画伯に日本画を学び「啓迪」（けいてき）と号した。明治三年に長慶寺本堂に造られた矢野小学校の前身である「啓迪舎」が号の由来かもしれない。

●明治四三年（1910）（一八歳）

京都、東の洞院にて、円山・四条派の流れをくんだ鈴木松年画伯に学び「嘯月庵雲僊」と号した。同時代の松年の元では、鈴木松僊・土田麦僊・上村松園らが席を連ね、後の京都画壇を代表する画家を輩出している。雲僊の初期の画風には、この松年の大胆で豪快、そして荒々しい筆法に倣うものがある。

●大正四年（1915）（二三歳）

京都より矢野町に帰郷する。

●大正五年（1916）（二四歳）

郷里矢野村において、秋の祭典にむけての尾崎郷社（尾崎神社）の改築に際し、数百人の有志による絵馬の奉納が予定され、その製作依頼を受けた。五ヶ月前より着手し、図は釣鐘弁慶で縦6尺2寸横8尺のものが大正五年9月に奉納された。完成した絵馬とともに写る当時の「渡辺雲僊」。



山口県の藤原賢然禅師（のちに天徳寺住持、天鏡と号す）のもとで深く参禅し無食生尊の教えに精進する。画禅一如の境地を目指した。師より耶馬溪の絶景を聞く。

●大正六年（1917）（二五歳）

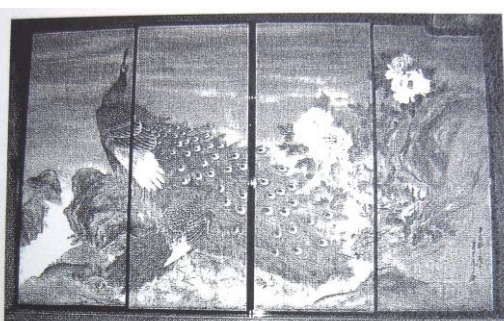
同郷の頼山陽を慕い耶馬溪探勝を志す。画具を背負い、網代笠に鞋ばきの雲水姿で大分県の中津城下に入り、中津の養寿寺に寄寓する。しかし、「耶馬の山霊いまだ我を迎えず」との境地で、豊前中津で絵の腕を磨いた。耶馬への入山を五年ほど待ち、機が熟するのを待った。その間、求めに応じて絵を描き、住職とともに托鉢し、境内の松尾芭蕉を顕彰した「芭蕉堂」の再建に力を注いだ。

●大正九年（1920）（二八歳）

浄土真宗本願寺派「眞光寺」（福岡県築上郡椎田町高塚530）の玄関衝立、本堂彩色襖絵を描く。



衝立 猛虎図 雲僊筆 眞光寺



本堂彩色襖（ボタンに孔雀図襖）



寒山拾得図衝立 雲僊筆 眞光寺

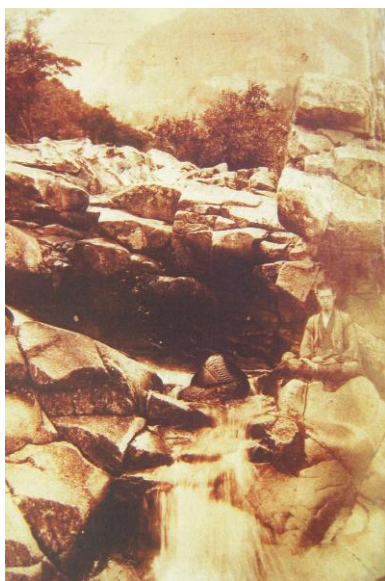


本堂彩色襖（波涛岩上に孔雀図襖）

●大正十年（1921）（二九歳）

時がきて耶馬溪に入る決意をする。雲水の旅姿で中津市の養寿寺を出立し、途中、中津市湯屋の瑞泉寺に立ち寄り襖絵を残し、そこに「辛酉夏六月五日 耶馬溪入山途」と一筆残して耶馬溪に入った。頼山陽が賞した耶馬溪の景観を探勝し、時には樹下石上に座して冥想し、「画禅一如」の仙境に入り、六百有余の作品を残した。

左写真は耶馬溪の石上で座禅を組む「雲僊」



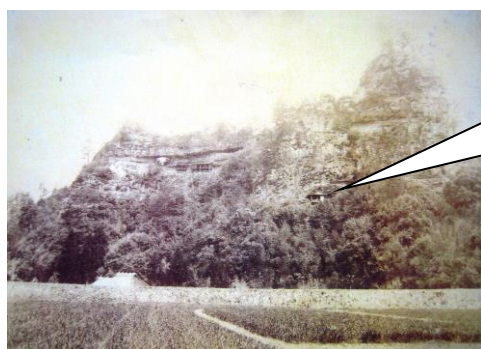
地元の人々とも交流し、本耶馬溪の地では「小野桜山」（おのおうざん）らと交わった。

「小野桜山」―広島県深安郡神辺町出身の漢学者。明治20年耶馬溪を訪れ、永住の地とした文人。耶馬溪の景勝保存とともに、地域に学問を広めようと2800部、1万冊にも及ぶ和漢典籍を収集し、後世に伝えようと活動した。馬溪文庫として『耶馬溪風物館』に保管されている。

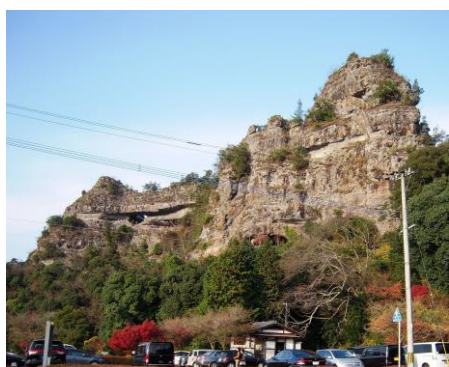
●大正十一年（1922）（三〇歳）

耶馬溪の景勝地のひとつである古羅漢の「飛来峰」の一角に、地元の名士らに支えられて耶馬溪探勝記念の草庵を結び、「雲僊窟」（うんせんくつ）と名づけた。その庵は岩窟を利用した掛け造りで、自ら岩肌を「雲僊窟」と刻み、風流墨客と交流した。

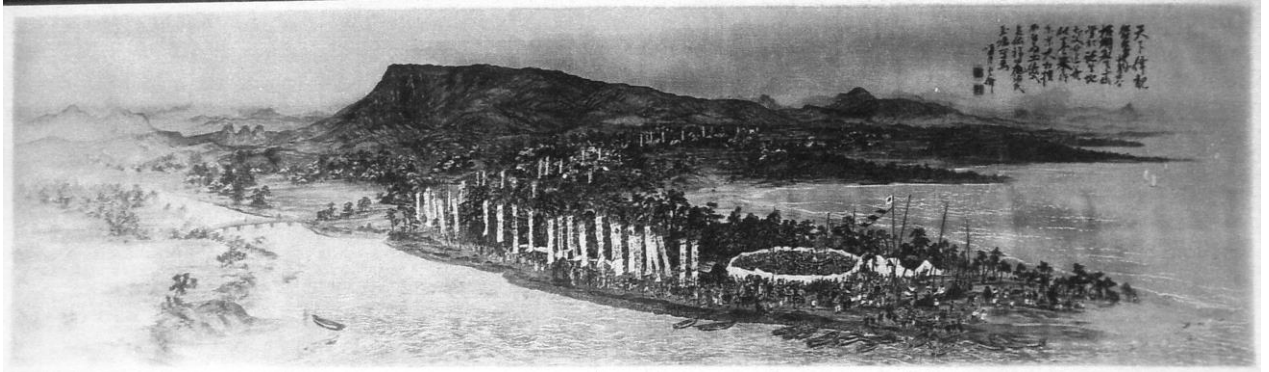
雲僊窟



大正十一年



平成二四年



●昭和一八年（1943）（五一歳）

太平洋戦争がはじまると、画家として国家に御奉公したいと県に申し出をして大分県下をくまなく行脚し、戦死者の家族から戦死当時の話を聞き、それを画布に再現して霊前に供えて菩提を弔った。

●昭和二九年（1954）（六二歳）

戦後、米国人の日本文化への関心が高まり、米軍小倉キャンプの報道部長ガイシンガー大尉夫妻が「雲僊」宅を訪問し、日本古来の芸術と美に感嘆した。後日「雲僊」画伯は小倉キャンプへ招待された。



●昭和四五年（1970）（七八歳）

病（神経痛）で絵筆を手にせず。俳句への造詣が深く、『ひょう楽』と号し、俳句を楽しむ。陶芸、細工などにも精通し多彩な作品を残した。



●昭和四七年（1972）（八〇歳）

九月九日中津市万田の自宅で親しい人々に惜しまれつつ永眠した。

十一月、遺作の保存運動がおこる。



●昭和五七年（1982）

頼山陽没後一五〇年の年にあたり、藩政期から明治、大正にかけて耶馬溪に遊んだ文人・画家の画墨展が中津市で開催され、頼山陽が学僧雲華に贈った水墨画「耶馬溪図巻」、富岡鉄斎が描いた「山国から洞門へ」、小杉未醒・田山花袋作の軸物「羅漢寺指月庵」、高浜虚子の短冊などの作品とともに、屏風、額、扇面など数点の「雲僊」の作品が展示された。

●多くの作品のうちの一部を紹介する。



●昭和六二年（1987）

●古羅漢探勝道が完成し、『雲儼窟』が紹介される。

頼山陽の水墨画も
合紙の花台員下して馬車夕
虚子
藩政明から明治、大正にかけ耶
馬溪路に遊んだ文人、画家の足跡
を辿る画墨展が自から中津市
日ノ出町、メガネのワタナベ・キ
ャリで始まった。

中津・下毛在住の所蔵家から寄
せられた水墨画は、頼山陽が学僧
・雲華に贈った「耶馬溪図巻」
（十一頁、今永正樹氏蔵）明治三
十年代、富岡鉄斎が描いた二山園
から洞門へ」（十三頁、同）など
の大作をはじめ小杉未醒・田山花
袋作の軸もの「羅漢寺背月庵」
（伊東真純氏蔵）高浜虚子の短冊
など耶馬へのオールド・ファンな
ら懐かしい作品ばかり。

今年には山陽没後五十年、同展
の世話役の一人、今永正樹さんは
「耶馬の今昔をしのぶすがに一人
でも多くの方に見てもらいた
い」と語っている。入場無料。4
日まで。

渡辺雲儼作の「耶馬溪畔風」も展示されている耶馬溪画墨展

7年(昭和62年) 6月10日 (水曜日) (12)

大分版

丸木が作られた探勝道の階段

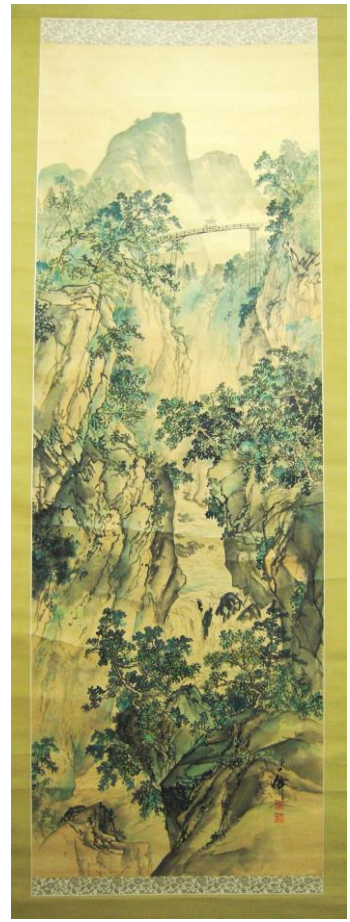
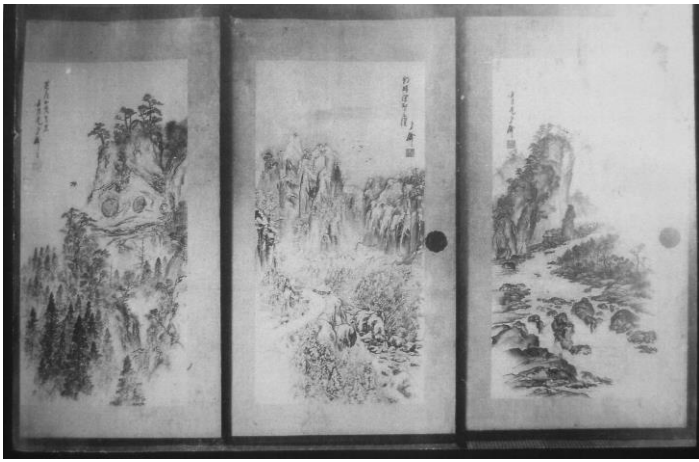
下毛郡大田町馬場町の古羅漢・探勝道が完成した。朝
光寺・羅漢寺の古羅漢道に
じりじり歩いた。一歩の足音は古羅漢の足音に
響いて来た。あめ。

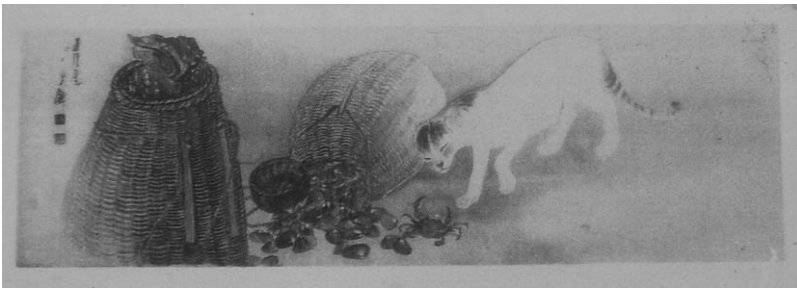
古羅漢は羅漢寺のある山に、法華寺の坂は丸木
で田んぼを築いて来た。あめ。また、丸木の探勝道
は、山。さへは、丸木の探勝道に
響いて来た。あめ。

下毛

もに修繕された。丸木は、丸木の探勝道に響いて来た。あめ。また、丸木の探勝道は、山。さへは、丸木の探勝道に響いて来た。あめ。

【通 信 部】
支 局 02361
支 局 02029
支 局 02175
支 局 02365
支 局 02480
支 局 02333
支 局 02333
支 局 02333
支 局 02333







陶芸や細工にも精通した。



●おわりに

このたび本誌に、二回にわたり「渡辺雲僂」氏に関して記載させていただいた。あるきっかけから、偶然にも「渡辺雲僂」氏の孫娘さんを知り、大正時代の矢野町を舞台とした、お互いの祖父

が主人公ともいえる驚きのドラマが明らかになった。ドラマの詳しい内容は前回本誌に記した。今回は、まさにその主人公である「渡辺雲僂」氏の経歴を中心に記載した。彼は多くの作品を残している。素人の私が、そのうちの一部を取り上げて本誌に記すことには、いささかためらいがあった。しかし、前回記したように、先人の残したものは、残された者がしっかりと伝えてゆく努力をしなければ忘れ去られてしまう。このたび「渡辺雲僂」氏のご息女やお孫さんがその努力をされているのを知った。そこで、孫同士として私とご縁ができた、いや、祖父同士からすでにご縁があった驚きの事情から、微力ながらお手伝いができればとの思いで記してきた。矢野町および矢野町の皆さんが拙稿をお読みになったのを契機に、郷土が生んだ日本画家「渡辺雲僂」を記憶に留めていただき、伝えていただけるよう願って終わりとしたい。

◎ 稿を終えるに当たり拙稿に掲載の場と多くの助言を頂いた矢野郷土文化研究サークル 発喜会会長 楠 精洲氏に感謝します。
◎ 多くの資料の提供を「渡辺雲僂」氏のご親族から受けた。

筆者紹介



・ 祖父・父ともに昭和三二年まで矢野町砂原で山崎医院開業
・ 昭和二五年 矢野町砂原で出生 菊水幼稚園第一回卒園